最後の一葉

弥招 栄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
最後の一葉

【Ｎコード】
Ｎ８０６４Ｃ

【作者名】
弥招　栄

【あらすじ】
病院の窓の外には、つたの葉っぱがゆらゆら揺れていた。あの葉っぱが全部散っちゃったら、ほのかちゃんは死んじゃうの？※この作品は、夏ホラーサイトに書き下ろしたものを、企画の終了に伴い、こちらに再投稿したものです。

「ねえ、最後の一葉っていうお話知ってる？」
ほのかちゃんが、窓の外を眺めながら、そう聞いてきた。
「ううん。知らない」
「そう」
首を振るぼくを振り返りもせずに、ほのかちゃんは言った。
ぼくはベッドから降りると、松葉杖を使わずに、片足でぴょんぴょんとほのかちゃんの隣まで跳ねていった。ぼくよりもひとつお姉さんなのに、ぼくよりも小さいほのかちゃんの隣に立って、同じように窓の外を見た。
ぼろっちい病院の、もうひとつの建物が見える。長いつたが一本、壁に張り付いていた。もう茶色くなっていて、枯れた葉っぱが何枚か風にひらひら揺れている。
「どんなお話？」
「あのね、女の人が病気でずっと寝ていたの。それで、仲のいい男の人にね、言うの。窓の外の壁には、つたが生えてて、葉っぱが一枚だけついてるの。あの葉っぱが散ったとき、わたしも死んじゃうんだわって」
「ふーん」
ぼくは横目でちらりとほのかちゃんを見た。いつも生意気なのに、今日のほのかちゃんはなんか寂しそうだ。胸の中が、どきどきする。
「私の病気もね、もう治らないんだって」
「そ、そうなの？」
「うん」
ぼくは、とても悲しくなった。ぼくは交通事故で車にひかれて、足の骨がボキボキになっちゃって、ずっと動けなくて、それでも寂しくなかったのはほのかちゃんがいたからだ。ぼくはもうすぐ退院できるけど、ほのかちゃんは……

「ねえ、女の人はどうなったの？　葉っぱが散って――」
「ううん。葉っぱは散らなかったの。男の人がやってきた日も、次の日も、その次の日も」
「じゃあ」
「うん。女の人は死ななかった」
「よかった。……でもどうして？」
どうして葉っぱは散らなかったんだろう。
「本当は、葉っぱは散ってたの。でも、男の人は絵描きさんでね、最後の葉っぱが散った夜に、本物の葉っぱそっくりの絵を、壁に描いたの。だから、女の人は死ななかった」
「そう、よかった」
「でも、私には絵をかける友達はいない」
「でも、でも……」
何か言ってあげたくて、でも、ぼくは何を言ってあげたらいいのかわからなかった。
「また一枚散った」
窓の外、壁のつたの葉っぱはあと四枚。
「あ、また」
あと三枚。
「あの葉っぱが全部散ったとき、きっと私も……」
お願いだから散らないで。ぼくは神様にお願いした。だけどまた一枚。
「ねえ、お話とは違うんだか――」
いつの間にか、ほのかちゃんはいなくなってた。

どうしたらいいんだろう。ぼくは一生懸命考えた。ぼくは、図画の成績はがんばりましょうだったから、ぼくが葉っぱの絵を描いても、絶対にすぐばれる。でも、葉っぱが全部散っちゃったら。

ほのかちゃんは死んじゃうの？

絶対に駄目だ。ぼくが退院して、ほのかちゃんと会えなくなるって考えただけで泣きたくなるのに、死んじゃうなんて。

でも、どうしたら。

……そうだ、散らなかったらいいんだから。

のりではっつけちゃえば。

そうしたら葉っぱは散らない。のりは宿題の代わりだって先生が置いてった工作用ののりがある。

そしてぼくは夜になって、看護師さんに見つからないように、向かいの建物に行った。

廊下の窓を開けて、そこから外に出た。松葉杖は邪魔だから、窓のところに置いといて、壁の出っ張りを伝って、葉っぱのところへ。落ちたら死んじゃうのかな。そう思ったらブルブル震えた。でも、ぼくが頑張らないと、ほのかちゃんが。

あった、あの葉っぱだ。

葉っぱは、もう一枚しかない。でも、間に合った。

ズボンのポケットに入れてたのりをだして、葉っぱに手を伸ばす。あとちょっと。あと、もう少し。

だけど――

風もないのに――

まるで何かにちぎられるように、葉っぱがつるから離れた。

あ――

思わず手を伸ばしたぼくの身体も、壁から離れた。

そのとき、葉っぱを細くて白い指がつまんでいるのが見えたような気がした。それはまるで、ほのかちゃんの指みたいだった。

そして落ちながら、ほのかちゃんの声が聞こえた気がした。ほのかちゃんは、お話の続きを話していた。

（でも男の人はね、絵を描くときに冷たい雨にぬれちゃって、病気になって死んじゃったの）

じゃあ、ぼくも？

病院の屋上の、フェンスの外でほのかちゃんが笑ってた。ぼくは、頭とか、背中とか、いろんなところが痛かった。

（けんたくん。ずっと友達だよ）

ぼくはうなずいた。ぼくはまた胸がどきどきした。

（みんなもずっと友達だよ）

ぼくの周りの男の子たちも、こくりとうなずいた。みんな、いろんなところを怪我して、血をどくどくどくどく流していた。ぼくの隣の子は、首があっちのほうを向いていた。向こうの子は、足と手がぐにゃぐにゃだった。

中庭のほうで、病院のみんなが大声で話していた。

「また子供が飛び降りた」

「外科病棟の菅原君だ。どうしてこんなところで」

「やっぱりこの病院はおかしいわよ。どうして同じ年頃の男の子ばっかり」

ぼくは、ぼくたちは、ずっとほのかちゃんと一緒だね。

（fin）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8064c/

最後の一葉

2010年10月15日12時25分発行